



填詞 假名垣曾文記

東錦浮世稿談 松林齋琴鶴

幕府の泰命 泰山を輕し 士士の馬術  
飛鳥と称く 曲木ふれども 意の駒は猿轡  
綱と抹をきん 愛宕は石階百段と短せん  
擅騎とすも 割女愈も 百生やほく 一まの  
意傳心なんぞ 藝術のが 拙に依らん 遮莫  
曲木の馬術乃 精妙の彼 小栗氏が 基盤  
此先就てゆく 業とやそむ

曲木平九郎

現在も愛宕神社の境内には「平九郎手折りの梅樹」があります。

想上閣  
松方  
錦盛堂

あずまのはなうき よ こうだん まがき へい くろ う  
東錦浮世稿談 曲木平九郎

さくしゃめい つきおかよしとし せいさくねん けいおう ねん  
作者名 月岡芳年 制作年 慶応3(1867)年

たかまつ まるがめ はん かしん まがき へい くろ う さん だいしやうぐん とく がわい えみ つ め まえ きやうこうばい  
高松(丸亀とも) 藩家臣の曲垣(曲木) 平九郎は、3代将軍徳川家光の目の前で、急勾配の  
あたごやま いしだん うま ちやうじやう うめ えだ と せいこう しょうざん  
愛宕山の石段を馬でのぼり、頂上の梅の枝を取ってくることに成功し、賞賛されました。



くわしくは  
デジタルミュージアム